
満月鬼

安倍椿

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

満月鬼

【Nコード】

N0728A

【作者名】

安倍椿

【あらすじ】

時は平安。平安の意味とは裏腹に都は残忍な殺人鬼、満月鬼によって恐怖に突き落とされていた。この事件の解決に二人の男と、一人の陰陽師が立ち向かう。

一 満月鬼参上

無惨な死体が、横たわっていた。中年の男死体である。その表情は苦しみに歪んでいた。首には一本の赤黒い痣があった。肌は青白くなり冷たい。

悲しかった……。つらかった……。

「さあ行くよ。」

後ろから声と同時に肩に大きな手が掛かった。

声をかけられた少女は死体を見つめ直し、声を追いかけた。

そして少女は小さく呟いた。

「さようなら。お父上。」

少女は知らなかったなぜ父親が死んだのか、なぜ自分はここにいるのか。何もわからなかった。ただ、少女の意思のなかにはあることが一つ漠然と存在していた。

天球の篡奪者の抹殺。

それが、ここに自分がいる理由だと。思った。

「満月鬼」

時は平安時代。繁栄と衰退が同居し、人々が闇を最も怖れた時代。

「またでたそうだぞ。高次。」

藤原一識は源高次に声を弾ませて言った。

内裏のとある建物のとある廊下で二人は歩きながら話していた。

「何がだ。」

高次は素っ気なく答えた。

「あのなあ、お前、脳天気すぎるぞ。少しは世の中の流行話くらい知っとけ。そんなことじゃあ、お前、一番に宮中で話の合わせられん世間知らずのばかな七光り貴族だと思われて、誰からも相手にされなくなるぞ。」

一識は半ば怒りながらも呆れた様子で言った。

しかし、当の高次は顔色ひとつ変えなかった。

「満月鬼のことだよ。」

一識は口をとがらせた。

藤原一識は右大臣を父に持つ貴族で頭の良さでは都の中では並ぶ者なしと言われるほどの秀才だった。

一方の源高次は芳花皇子を父とする貴族で楽に関しては天性の才能

をもつ男だが、なにかと疎い。テンネンボケ気味そして、その純粹さは天然記念物である。悪く言えば子供そのもの。

しかし、根っからの善人。

「満月鬼？何だそれは。」

「まったく、本当に何も知らんのだなお前は。それでよくこの世に存在していたなあ。」

「もういいだろう、これからは少し気をつけるようにするから教えてくれ、満月鬼について。」

一識は話し始めた。

「ここ半年ばかり貴族が殺されている。先月は藤原友紀彦殿が二条の自宅で首と胴を離されて殺されていた。しかもまだ首は見つかってない。その前の月には源実利様と同じように首が見つかってない。高位の貴族の首の見つからない死体が月に一度発見されている。犠牲者は今のところ五人だその内、氏が源の者が三人、藤原が二人だ。しかもみな満月の日に殺されている。だから巷では満月鬼と呼ばれている。」

「恐ろしいな。」

「いいか高次。用心しろ。犯人は源氏と藤原氏を狙っているようだ。俺達の元にもいつ犯人の手が及ぶとも限らない。」

「しかし、計画性の高い犯人だな一体何が目的なんだ。」

「さあな、あいにくおれは事件の捜査には関わっていないからな。」

一識がそういい終わると二人は歩く速度を速めた。

二人が曲がり角に差し掛かった時だった。

「これ、一識。」

声を聞いて一識は立ち止まり肩をすくめ高次の顔を見た。高次は運が悪かったなあと苦笑いをした表情をした。

「これこれ一識。」

一識は仕方ないという表情をしてため息をつき表情を戒めた。

「御用ですか父上。」

声の主は一識の父親の右大臣だった。面長の顔に鯨のような長い髭を持った男は思案あるような目で高次を見て微笑んだ。

「これは高次殿。おじの左大臣殿のご様子はいかかですか。ここ三日風邪をひいていとお聞きしているのですが。」

「気に掛けてくださりありがとうございます。おじは人並みはずれた生命力を持っていますから心配ありませんよ。今朝は粥を五杯食べたとおばから聞いていますし。全く本当に病人なのかと疑うばかりです。」

満月鬼

「そうですね。さすが御丈夫なお方だ回復して逸早く朝議の場にお戻りになられることをお待ちしております。と、お伝えください。」

そう言っただけで口を隠し何か思案ある目で高次を見て、表情を元に戻すと一識に顔を向けた。

「ところで、一識。そなたに大事な話があるからあとで私の所へ来なさい。」

「わかりました。用が済み次第行きます。」

一識は弱々しく言った。そして右大臣は頭を下げた二人の間を通り過ぎていった。

「また父上の手伝いだ。」

頭を上げた一識は不満をあらわにした。それを高次はごく普通の事のように聞いていた。

「まあそれも、有力貴族を父に持つ者の定めだな。あきらめろ。」

高次は他人事のようにすました声でいった。そんな高次をにらみ一識はその場を去った。にらまれた高次はきよんとしてその場に立ち尽くした。

（俺何か悪い事いったかな。）

高次は視線を進行方向に戻した。すると視線の先には一人の男が立っていた。白い直衣を着ていて顔は女のようなだった。体の線も細く、何か悲しそうな目をしている。

男は高次に深く一礼すると一識が向かった方向に姿をけしてし

まった。

高次は男の不思議な雰囲気強い印象を持った。

春の桜色の風が高次を包んだ。その風は温かさと、これから来る、男と一識、そして、高次を巻き込む悲劇を予兆している様だった。

高次はそんな風をやつと暖かい春が来たのだなと、喜んでいるのだった。

その日の夜、高次は一識の家に行った。そして、二人で何も言わず庭にある桜を見ていた。

ふと、高次が口を開いた。

「ところで、一識。今朝、右大臣殿に何を言われたんだ。」

「満月鬼の事だよ。」

「へえー。」

「お前、父上と、お前の伯父上殿が敵対しているのは知っているだろっ。」

「ああ。」

満月鬼

「今朝も話したが、満月鬼は宮中でも大きな問題になっている。それで父上が犯人をつかまえると、俺に言ったのだ。」

「そうか。」

「高次、そうかじゃないぞ。」

「えつ。」

寝ぼけたような声を発していた高次は、一識の言葉に声の張りを戻した。

一識は視線を桜から高次に向けた。そして、静かに微笑んだ。その顔を見て高次はいやな予感で顔をしかめた。

「父上に、この件に関しては、条件付きでお受けした。」

「条件？一体どんな。」

「この件は必ず高次と共に関与させてほしいと、な。」

「なっ、なに。俺もやらねばいけないのか。なぜそんな事を言った。お前、俺に関与させたら、もし犯人を捕まえたとしても右大臣殿の一人手柄にはならないぞ。」

「そこだよ。」

「そこ？」

高次は一識の言っている事がわからなかった。一識は視線を高次から桜に戻し話し始めた。

満月鬼

「俺は関わりたくないんだ。幼いころからずっと見てきた。自らが

権力を握るためには何も顧みない、欲に飢えた父をずっと見てきた。もういやなんだ、そんなのに関わるのも、そんな人間のあさましい姿を見てるのも。高次、俺は決してどちらにも手を貸しはしない。だから、すまないが手を貸してほしい。」

高次は一杯酒を飲み、一識を安心させるように言った。

「そんなことなら、お安い御用だ。俺はてつきり、さっきの腹いせに俺をこんなことに引き込んだのかと思ったよ。」

この男、いくら嫌でも友には惜しみない協力を注ぐ。

「そのことも理由の一つだがな。」

高次は少々だが自分の言動に後悔して、苦い顔をして酒を一気に飲み干した。

「一識様。例の方がお見えになりました。」

奥の廊下から一識の侍女の声がした。

「通してくれ。」

「一識さつきから聞きたかっただが、円座がもう一つ置いてあったのは今から来る客人のためか。なら俺は」

「いや、帰らなくていいんだ、高次。お前にも関係あることだから。」

すると、侍女に連れられて、白い狩衣を着た要人は二人の元へ

来ると、深く頭を下げた。そして、そのまま言った。

「このたび右大臣様に命じられ、事件の解決の手伝いを仰せつかりました。陰陽寮 陰陽師 安望あんのおぞむでございます。」

そこにはいたのは、先ほど廊下で会った男だった。声はとても女のようなだった。物腰柔らかそうな、その動作が美しさと女らしさを強調させた。女のような男という言葉道理の人に思えた。

男は一通り挨拶を済ませると面を上げた。すると、水を感じさせるような美しい肌、潤いに満ちた目、まっすぐ通った細い鼻、冷淡に整えられた唇をもった男の顔が現れた。正に「水も滴る・・・」だった。

一識は男に酒を勧めた。男も勧められた酒を静かに微笑んでから飲んでいた。そんな男を高次は不思議そうに見ていた。

「高次、おまえ勘違いしていないか。」

一識が面白そうに高次を眺めながら言った。

「えっ、何をだ。」

「望殿を男だと思っているだろう。」

高次はきよとんとした顔を二人に向けた。

一識は笑いながら望の顔を見て言った。

「すまん、望殿。この高次ぐという男は、何かと疎いのだ。少々

の事は許してくれ。」

「まさか、望殿は。」

高次は、ハツと驚いたような顔をして望の顔を見た。

望はそんな高次の顔を有るか無しかの微笑で見た。そして、言った。

「高次様、私は女子でございます。」

「そつ、それはすまないことをした。許してくれ望殿。私はてつきりあなたを……。」

高次は言葉に詰まって酒を一気のみした。

その様子を望は小さく微笑みながら言った。

「いいえ、お気になさらずに。」

「ところで、望殿これまでの満月鬼に関する情報を教えてくれないか。」

望は体を一識のほうに向けて静かに言った。

満月鬼

「はい。満月鬼が現れたのは今から七ヶ月前です。犯行の仕方は同じで首と胴が離されて殺されています。そして、首はすべて見つかっていません。殺された人の関わりを調べてみた結果、源氏と藤原氏の人間が殺されている事がわかりました。しかも、源氏・藤原氏・源氏という順番で殺されています。どうやら犯人は、この二氏を狙

っているようです。このことから推測すると、先月は藤原だったので今月は源氏の誰かが殺されるでしょう。」

高次は聞いた。

「望殿、それが誰かは、わかりませんか。」

「おそらく、次は源只輝様でしょう。」

「何！三条の只輝殿というのか。そつ、それは、なあ一識、次の満月はいつだ。」

一識はしまったという顔をして立ち上がり後ろを向き大声で叫んだ。

「今すぐ出かける大急ぎで出かける準備をせよ。」

一識は高次達の方を向いて言った。

「只輝殿のところへ行くぞ。まだ間に合うかもしれない。」

「だが、なぜ今から行くのだ。」

高次は一識の言っている事がわからなかった。

そんな高次の言動に一識は怒りをあげた。

「のんきすぎるぞ高次。お前今日の月がなんだと思ってる！今日は満月だ。」

満月鬼

高次は一識の剣幕に首をすくめた。

そこに望が、声色変わらず言った。

「一識殿。落ち着いて下さい。もう手は打ってあります。」

「手？」

一識はこんな時によく落ち着いているな、と思いながら聞いた。

望も表情を変えず言った。

「はい、私の式神を只輝殿のところによっています。犯人がただの人なら式で十分ですが、そうでなければわかりません。まあ、とりあえず行きましょう。件の方のお屋敷へ。」

そう言って、望は立ち上がって二人の間を通り去ってしまった。

二人もその後を追った。

一識と高次は牛車で望は馬で只輝の屋敷へ向かった。牛車の中から高次は馬を走らせる望を見て感心しながら言った。

「まったく、すごいな望殿は。あのように馬を乗りこなしている。俺だって乗れるが、さすがにこんな長い距離をあんな速さで乗れんぞ。よくあんなに、平然と乗っていられるな。なあ、一識。陰陽師とは、馬術にも長けなければならぬのかな。」

一識がのんきな高次の言動に呆れ声で答えた。

「陰陽師といわれどんなに尊敬されていても、たかだか正下六位の

下級の役人だ。武芸もたしなまんと貴族には重宝されんさ。下級役人など貴族の刀避けだ。半分は武人扱いだからな。代々の下級役人の家は文道と同じぐらいに武道もたしなむのが、当たり前だ……。高次、もつと国を知れ。お前はいい男だ。だが、知らなすぎる。この国の実情を知るのもお前がこの国の貴族である以上の義務だ。」

「そうか……。すまなかつた。」

「俺に言つな。それはこの国の民に言え。」

そう言つて一識は扇子で顔を伏せた。隣にいる男は国の事実を何も知らない。しかし、彼が穢れ無き良心の塊でいられるのも、また事実を知らないからであつた。一識は貴族の中に生きながらこんなにも清らかな心を持つ者を他に知らなかつた。そして、いつも理想とし目指していた。彼の無知に怒りを覚えると同時に、無知のままできてほしいと願つてもいた。己の心に巢食う穢れを憎みながら、目をつぶり静かに考えていた。

そうして、しばらく考えていると、高次の声が一識を一人だけの世界からこの世に戻した。

「一識、着いたぞ。」

「ああ。」

二人は牛車から只輝殿の屋敷の門の前に立つた。門の前には静かに望がたつていた。疲れの色一つ見せず、望は二人の前に静かに微笑んで立っていた。しかし、その微笑みは暖かさの無い微笑みのような感じがして高次は望を恐ろしく感じた。そして、一識は考えを頑として読み取らせない、その謎めいた望の表情を注意深く見て

いた。

望は門の方に向き直り独り言のように呟いた。

「まだ、只輝殿のお命はあります。しかし、このままでは……。行きましょう。」

そういつて、門を開けた。門の向こうの光景を見て一識と高次は愕然とした。

そこには。胴と首を切り離された只輝の家臣たちの遺体が横たわっていた。そして、辺り一面が血の海と化していた。強力な血の臭いが三人を包み込んだ。あまりの臭いに高次は鼻を塞いだ。

「ひどい。」

高次は小さく呟いた。

動揺する二人を尻目に望は屋敷の中に入っていた。その後を二人は恐る恐るついて行った。そして、只輝の寝室らしきところへついた。部屋の奥には猫のように怯えて隅に丸まっている只輝がいた。一識と高次は只輝の側に駆け寄った。

「大丈夫ですか。只輝様。お気をしっかり。もう、怪事は修まりましたよ。さあ、お気をしっかり。」

高次は只輝の肩をかつぎ起こした。そして、静かにすのこの方へ連れて行った。

望は空を見ながら小さく言った。

「香奔。廉浴。」

すると何処からとも無く二人の女が望達の前に現れた。二人の女は唐衣を着ていた。

「わあっ。あああ」

只輝はまた満月鬼かと思ひ悲鳴をあげた。

すると、望が只輝の元にきてなだめた。

「ご安心下さい。あれは、私の式神です。あなたの世話をさせるために呼び寄せました。怖がらせてしまつたようならお詫びいたします。さあ、その成りではなんでしょう、この式たちに手伝わせますからお着替えをなさってください。さあ。」

「本当に、だつ、大丈夫なのか、もうこないのか。」

只輝は体を震わしながら言った。

望は静かに言った。

「大丈夫です。もし何かあればこの式たちがあなたの身代わりになりあなたを守ります。ご安心下さい。さあ、香奔。廉浴。お手伝い差し上げなさい。」

満月鬼

香奔と廉浴は只輝の前に膝をつき頭を下げたから、只輝を奥に連れて行った。

望は廊下に落ちてある、首が切られた人形の紙人形を拾った。そして、静かに見つめていた。

「これが、あなたが行かせていた式神ですか。」

「はい。どうやら犯人はただの人間ではないようです。」

そういつて望は紙人形を懐に収め先程通った門の所へ向かった。その後を一識と高次は追いかけた。二人は望の行動が理解できなかった。しかし、望は自分たちよりも長くこの件には関与しているのを解っていたので何ら疑問に思うことはなかった。

望は門に面した廊下の上からまた月を見始めた。そして、静かに呟いた。

「来る。」

そういつて高次が腰に差している刀を抜き取った。

刀を抜き取られた高次は一瞬むっとしながらも言い知れぬ不穏な気配に神経を研ぎ澄ました。

一識も高次と同じように前方からやってくる気配に身構えた。

望は小さく呪を唱え、刀を持って構え神経を前方に集中させた。一識も刀を抜いた。

満月鬼
そうして、しばらくの間時が流れた。数分しかなかっただろうが、三人にとってはとてつもなく長く感じた。

そして、何処からとも無く低い歌声が近づいてきた。

・・・栄華を極めし時はすぎ、手元の天球、今はなし。吾らは篡奪を許す事、永久になし。・・・

・・・満月の夜、刃は踊り、血は桜吹雪に変わり、荒山の墓は喜び勇む。吾は満月鬼なり。・・・

・・・満月鬼・・・参上・・・

歌が終わると同時に突風が吹き、閉まっていた門を押し開いた。門の向こうには白い狩衣を着た一人の男が立っていた。右手には刀を持っている。体は見えるのだが首から上は闇に飲み込まれたように真っ暗で何も見えなかった。

「お二人とも、身を床に伏せてください。」

望は小声で言った。しかし、二人とも目の前の男に気を取られ、望むの聲はまったく耳に入らなかった。

「二人とも、床に伏せなさい。」

望は語調を強くしていった。しかし、二人とも動かない。

前に立つ男は刀を上に大きく振り上げた。それと同時に大きな突風が望達に襲いかかった。

「伏せろ！カマイタチだ。」

望はそう叫ぶと同時に襲い来る突風を刀で受け止めた。風は威

力を弱めたが、弱めたとは言えども三人を後ろの壁に叩きつけた。高次は叩きつけられた衝撃で気を失ってしまった。そして一識は全身に襲う痛みに苦しみながら、顔を男のいた場所に向けた。

すると男は二人に、

「邪魔である。」

と言って。刀を宙に一振りした。一識は終りを覚悟した。自分達もここで死ぬと思い男を見た。望は刀を床に突き刺し、何とか立ち上がり呪を唱えた。

しかし、風は三人を通り過ぎていつてしまった。

望はしまったという顔をして急いでまた違う呪を唱え始めた。屋敷の奥のほうへ振り向いた。一識は動かない男を睨みつけた。

時すでに遅し望の甲斐なく、その声は屋敷中に木霊した。

「あああああ……………」

屋敷の主、只輝の断末魔の叫びだった。

望は落胆のため息をつき、刀を杖に奥へと歩き出した。一識は男に話しかけた。

「おまえ、一体……ナニが目的なんだ。」

「……………」

「何で・・・こんな事をする。」

「.....」

「答える！満月鬼。お前は一体、何者なんだ。」

一識が力いっぱい怒鳴りつけると、男は静かに独り言のように言った。

「吾らは篡奪を許す事、永久になし。」

そう言うと、男は屋敷から闇に溶けるように消えてしまった。その消えた闇に一識は叫んだ。

「吾らとはどういうことだ。お前はいつたいナニが目的なんだ。」

しかし、何も返ってこなかった。ただ、濃い闇が広がるばかりだった。一識は立ち上がり壁にもたれて座りこんだ。そうして、ポツと屋敷の門をむなく眺めていた。

しばらくそうしていたら、望が戻ってきた。一識は望に聞いた。

「只輝様は、どうなった。」

「残念ながら.....」

「そうか.....、しかし、一体あの男は。」

「ただの人間ではないようです。おそらく、かなりの方術にたけている者でしょう。」

一識は立ち上がりながら言った。

「そうか、今回はまあ仕方が無い。とりあえず、今日のところは屋敷に戻って、検非違使にここを処理するよう言っつて。私達は明日、御上に報告するでしょう。さあ、手を貸してくれ、高次を牛車に運ぼう。」

「お任せください。式に運ばせます。後天。」

すると、一匹の竜が出てきて高次を背に乗せて牛車へと運んでいった。その光景に一識は驚いた。しかしすぐに慣れた。

二人は屋敷の門を閉め、牛車の方へ目を向けた、すると、一識のお供していた家臣たちが首と胴を離されて血の海の中で死んでいた。一識はその光景に絶句し膝を着いて泣き始めた。

「許さない。満月鬼。私は決してお前を許さない。」

一識は渾身の力をこめて叫んだ。そして、地を叩きながら泣いた。そんな光景を望は無表情で眺めていた。

この夜、月はごく微かに赤く染まり、都一帯に満月鬼の喜びに満ちた笑い声が木霊した。

三日後の夕方。

三人は一識の家で酒を飲んでいた。さつきから高次は蚊帳の外

の扱いされている。話していることが三日前の事件のことだからである。高次は悔しそうに言った。

「なあ、おれにも話に混ぜてくれよ。」

一識は駄々をこねる子供をあやすような言い方で言った。

「だから、言っただろう、高次。結局、望殿が頑張ってくれたが甲斐なく満月鬼をつきとめられなかった、って。」

一識は決して、自分の家臣が殺された事を高次に言わなかった。望も決して言わなかった。一識が高次には言わないでほしいと頼んだからだった。一識は友にいらぬ心配をかけたくなかったからだ。た。

そうとは知らず高次は納得いかずふてくされた。そんな様子を見て一識は笑った。望も静かに微笑んだ。

「なんだよ、俺はすっかり仲間外れにして。もう俺はいいよ、一人で酒を飲むから。どうぞ勝手に楽しんでください。」

そう言って、二人にそっぽを向いた。

「そうはいかん、ふてくされ屋のお前がいるから楽しいのだ。ほっときはせん。」

一識は更に笑いながらいった。そんな一識の言葉を聞いて高次は睨みつけていった。

「誉めてくれているようには聞こえんのだが。」

「さあ、望殿、夕餉の支度が出来たようだ。さ、食べるにいきましよう。」

望は有るか無しかの微笑で答えた。

「いただきます。」

そこに更にふてくされた高次がいった。

「ほら、また俺を仲間外れにした。」

「そうすねるな、さあ、高次も一緒に食べよう。こんばんはお前の好きな豆腐があるぞ。」

「ほんとか。」

ふてくされた顔が一瞬にして笑顔に変わり食事をする部屋へ去ってしまった。

一識は望に言った。

「ほんと、子供そののでしょうか。」

「はい。純粋な人ですね。あのような方は生まれて初めてお目にかかりました。」

「そうか。多分。世界であいつだけだよ。あんなに純粋な大人。さあ、私達も行くでしょう。ところで、望殿。」

一識は望を呼び止めた。

「はい、なんででしょう。」

「あの日、襲われるのが何故、只輝様だとわかったのですか。」

「この前お会いした時に、死相が見えていたからです。それがなにか。」

「そうですね。いいえただ少し気になっただけです。さあ、行きましょう。」

二人は高次を追いかけた。

こんかい、事件を解決することが出来なかったという事で三人は一週間の謹慎という処分を受けた。謹慎のあいだ中この三人はずっとここで酒を飲むことに決めた。高次と一識は新たな仲間について知るために、望はこの二人を知るために。

これから始まる悲劇を知らずに……。

つづく

一 満月鬼参上（後書き）

どうも、安倍椿です。

初めてのロング小説です。

しかも、平安時代が舞台。

でも、登場人物などはみなさん架空の人物です。

ただ、時代だけ平安です。

たぶん、なかにはもう犯人がわかっている人たくさんいると思います。

もしよかったら答えを教えてください。

それではまた、次回作でお会いいたしましょう。

安倍椿

正頼という男（前書き）

満月鬼事件を捜査している、一識、高次、望だが、一向に満月鬼は捕まらない。捜査はまったく進展していなかった。

正頼という男

満月鬼

望、高次、一識、三人が出会ってから三ヶ月という月日が経ち、季節はすっかり夏になった。

桃色の花を抱えていた桜も今は青々とした若々しい葉をたくさん抱える桜になっていた。そして、セミの鳴き声が止めどなく響いていた。

そんな中、額に汗して書物を読んでいる男がいた。

その男の隣で、扇で顔を扇ぎながら酒を飲み、景色を見ている男が書物を読む男に声をかけた。

「こんな暑い日に、よく真剣に書物なんか読めるな。見てることだけが暑くなるよ。」

しかし、書物を読んでいる男は何も反応しない。ただ、黙々と書物を読みつづける。

「しかし、俺達が事件を調べ始めてから、三ヶ月。何も手がかりなしとは、今となっても望の力が頼り。困ったものだな。右大臣殿は早く犯人を、といつも急かす。まったく困った困った。何か手がかりはないのか。」

「そう思うんだったら、お前も自分なりに調査しろよ。そこでため息ついてても犯人は捕まらんぞ。」

「聞き込みなら、今朝からやってるよ。ここに来たのは移動ついでだ。疲れてたし、ちょっと休憩をと思っただけだよ。それより、お前のほうこそ書物ばかり読んで、一体、何調べてんだ。」

「事件に関係あることだ。」

「フン。」

男は酒を一口含み、庭の景色を見た。

その時、二人の前に屋敷の使用人が現われた。

「一識様。」

書物を読む男は書物から手を離し、使用人の方を見た。

「どうした。」

「客人がいらつしやいました。」

「望か。」

「いえ、たちばなの橘 せいらい正頼という方でございます。」

「橘 正頼？さて、いったい誰だ。まあいい。お通ししなさい。」

「はい。」

使用人は二人の前を立ち去った。そして、橘 正頼という男を二人の前に連れてきた。連れてこられた男は二人の前に深々と頭を下げて言った。

「右大臣様の命を受けて、満月鬼の捜査の協力に参りました。橘

正頼と申します。」

「父上の命？」

「はい。私も右大臣様の命を受けて独自に調査していたのですが、

一向に成果が上がらないので、一識様たちに協力するよう命じられました。」

「そうですか。ではさっそく、高次殿と一緒に聞き込みをしてきてください。」

すると、男は笑顔で答えた。その笑顔はとても穏やかで癒され、やさしく包み込まれるような顔だった。

「わかりました。お役に立てるよう。努力いたします。」

「よろしく。それじゃ行つてらつしやい。高次殿。正頼殿。」

一識はそう言って、高次のほうに作り笑顔の顔を向けた。

高次は子供のように拗ねた顔を一識にして立ち上がり、正頼と共に外へ出かけた。

一識はその様子を見届けて、また書物のほうに視線を戻した。

その夜。一識の屋敷にはさっきの三人が集まって酒を飲み交わ

していた。

橘正頼という男はとても穏やかで気さくな男だった。

また、一識の隣には一人青い涼しげな単を着た女性がいた。

美しい黒髪をもつ聡明そうな容姿を持った女性だった。彼女の名は和葉の姫といい、一識の妻だった。

しかし、妻を見る一識の表情はあまり浮かなかつた。

一識はこの妻が苦手だった。和葉の姫はとても知的な頭の切れるすばらしい女性ではあつたが気が強く、行動力が強く、口も強かつた。だから、和葉の姫と話をする、いつも論じ合いになり気が休まることがなかつた。一識はそれが嫌だった。それ故、一識は和葉の姫を避けていた。

和葉の姫は一識を愛していた。しかし、なかなか自分の元に来てくれないことに耐え切れず、今日は一識の元に自ら来てしまったのだつた。

和葉の姫は静かに一識の隣に座り三人の話を聞いている。

「ところで、一識。お前、和葉の姫殿と結婚してどれ位だ。」

と、高次が聞いた。

「丁度四年程になりますわ。高次殿。」

和葉の姫が答えた。

一識は顔をしかめる。そして、その表情を見て、高次は笑う。

「大事にされているのですねえ。妻が幼馴染と話すだけで、しかもつ面をしている。いい夫をお持ちになりましたね。」

「そんなことはないですわ。そのしかめっ面はやきもちではなく、私がおか不味い事でも言うのではないか、と思っっているからではないかと。夫は私を苦手に思っているのです。」

「失礼だぞ和葉。口を慎みなさい。お前は奥の部屋に入っていないさい。これからは大事な仕事の話だ。席をはずしてくれ。」

すると、和葉の姫は凜と構えて言つた。

「あら、一識様、私はあなたの妻です。妻たる者、夫の客人の世話をするのは当然です。夫の客人の世話をしないなんて、そんな夫に

恥をかかせる行為はあなたの妻としてできません。さあ、私は気になさらずにお話を続けて下さい。」

一識はため息をついた。

その様子を見て、高次と正頼は笑った。

「ところで、正頼殿には妻子はいらっしゃるのですか。」

高次が聞いた。すると、正頼は笑って答えた。

「恥かしながら、昔はいたのですが……。事情により別れてしまつたんです。」

「そうなんですか。悪いことを聞いてしまった。ごめんなさい。」

「いえ、気にはしていませんから。さあ、飲みましょう。ささ。」

そう言つて、正頼は高次の杯に酒を入れた。そして、高次も正頼の杯に酒を注ぎ、お互い一気に飲み干した。酒を勧める正頼の顔はとても温かく。心休まる魅力に溢れた表情だった。

「おい、酒を飲むのは一向に構わんが、仕事の話をお忘れなよ。で、どうだったんだ。今日は何か収穫はあったか。」

一識が水を差すように言った。

「なにも……。聞きまわつたが、大した収穫はなかったよ。」

高次はそう言つて、空を見た。

一識は立ち上がり、庭に降りて高次と同じように空を見た。

正頼も共に空を見上げた。

「また、誰か死ぬのか……。」

一識が悲しく呟いた。

三人の視線の先には煌々と輝く満月が浮かんでいた。

「正頼……。」

不意を突かれたように驚いた女の声が三人の背後から聞えた。

和葉の姫の声ではなかった。

三人は背後に向き返つた。

そして、和葉の姫は声の主を見て不思議そうな視線を向けた。

そこに立っていたのは望だった。望の表情は驚きに溢れていた。いつもの冷静な望はそこにはいないようだった。

「久しぶりだね。望。」

正頼がやさしく微笑みかけていった。

その言葉を聞いて、一識と高次と和葉の姫は正頼を見た。

望は何も言わず、表情を引き締めて、三人に背を向けた。

「すまぬ、急用を思い出した。」

そう言つて、望は一識の屋敷を出て行つてしまった。

「望？」

一識と高次は何が起こつたのかよく解らなかつた。

正頼は去つた望の後を追いかけていつてしまった。

「いつたい。何がどうしたんだ。」

高次は独り言のように言つた。

「私もわからない。」

次に一識が言つた。

「望様は正頼様の前妻なのですよ。」

和葉の姫が言つた。

「知っているのですか。」

高次が聞いた。

すると、和葉の姫は笑つて答えた。

「いいえ、女の勘です。」

「はあ。」

高次は妙に納得した表情をした。その表情を和葉の姫は見るなり笑つた。

一識は顔をしかめた。

一方、正頼は走つて望を追いかけた。そして、望を見つけた。

「まっつて、望。」

すると、望は静かに立ち止まつた。しかし、正頼には背を向けたままだった。

「驚かせてすまなかつた。実は、右大臣様のご命令で、望達と一緒に満月鬼の捜査をする事になったんだ。」

正頼はそう言つて、言葉を止めた。いや、止めたのではなかつ

た。言葉が浮かばなかったのだ。正頼はここにいる自分がわからなかった。すべてが、無意識のうちの動作だった。

「……………」

しかし望は何も返さない。背を向けたままだ。

「だから、私に出来る仕事があつたらなんでも言ってくれ。それが、解決につながるなら協力する。」

「……………」

望は何も言わず。正頼の言葉を聞き、足を進めた。望は溶けるように闇の中に消えていった。

その姿を正頼は残念そうに見つめた。

正頼という男(後書き)

前回、一気にたくさん量を載せてしまっただすぎたなあ……
(汗)と反省しています。安倍椿です。

なので今回は第二話を何回かに分けて出します。何回に別れるかは
わかりませんが……。

これからもよろしくお願いいたします。

安倍椿

満月鬼つかまる

翌日。一識の屋敷。

一識と高次は日も昇らない早朝から世話しなく働いていた。

そして正頼も二人の下に現われた。

正頼は息を切らしながら、頭を下げて言った。

「遅くなってすみません。あの、本当なんですか。満月鬼が捕まっ
たって。」

高次が口を開いた。しかし、一識も一緒だが、表情に驚きと焦
りが溢れていた。

「本当だ。昨晚、検非違使が……。」

「いったい誰だったのですか。」

「京極兼昌という男だ。」

高次はそう言うとうつつむいてしまった。そして、微かに嗚咽が
漏れ出していた。

そんな様子を見て一識は高次の肩を叩き目で下がっているよう
に合図した。

高次は静かに一識の後ろに下がった。

そして、一識は高次の代わりに言った。

「これから、私たちが直接話をする事になった。行こう。もう、
車が待っている。」

「解りました。ちょっと、一識様。」

正頼は走り出そうとする一識の袖をつかんだ。そして、高次に
一識は先に行くように言い、正頼を部屋の中に入らせた。

正頼は小声で一識に尋ねた。

「一体、どうして高次様はあのように取り乱しておいでなのですか。
何か関係があるのですか。それに、どうして、捕まったのですか。」

「そっ、それは……。」

一識は気まずそうに声を発した。一識は一瞬、この事実を自分

が言つべきなのか迷つたのだつた。しかし、仕事と割り切り一識は表情を固めて言った。

「実は、この京極兼昌と言う男。高次の腹違いの兄だ。」

「えっ……。」

「このさいです。すべて、お話しておいたほうがよろしゅうございますよ。あなた。」

その声は二人とも聞き覚えのある女性の声だつた。

「和葉。下がっていなさい。仕事に口出しするんじゃない。」

一識はため息をつき、眉間に皺を寄せて言った。

和葉の姫は深緑の袿をまとい部屋の中央に腰を下ろしていた。

そして、鋭い目つきで一識を見ていた。その眼はすこし一識に怒りを持っていてようだった。

一識は和葉の姫の前に座り言った。

「和葉。まだ怒っているのか。」

「違います。私は真実をちゃんと正頼殿に言つて差し上げるべきだと思つたから、言つただけです。」

「わかつた。正頼殿にはちゃんと言うから。お前は奥に行つて、大人しく私の帰りを待つていてくれ。」

和葉の姫はしばらく、一識の目を見て拗ねたような表情をして、言つた。

「わかりました……。」

そう言つて、和葉の姫は渋々腰を上げて一識を振り返りながら、部屋を後にした。

一識はため息をつき正頼を見た。

正頼は一識の前に座り言つた。

「お気持……。お察しします。」

「ありがとう。実はな、高次にとって京極兼昌という男は唯一の家族なんだ。高次の父親には何人かの妻がいたが、そのうち、子供を産んだのは二人。高次の母親と、兼昌の母親だ。高次の母親は高次を産んですぐに死んでしまい、父親も流行りの病で死んでしまった。

身寄りのない高次は父親の遺言で兼昌の母親の元に引き取られた。その時、高次は五歳、兼昌は十五歳。

兼昌の母親は高次を嫌っていた。正確には高次の母親を心底嫌っていた。だから、その母親から生まれた子、高次を嫌わずにはいられなかった。だから、高次はいつもひどい扱いを受けていた。だが、幼かった高次がそんな環境に耐えられたのも兼昌がいたからだ。だから、高次にとって兼昌はとても大切な人なんだ。」

「そんな人がどうして……。」

「昨日の夜。少納言の源 晃弘様が満月鬼に殺された。そして、その晃弘様の屋敷から出てくる血だらけの兼昌を見た者がいたんだ。」

「それで……。」

「正頼殿。高次は今とても動揺している。どうか……。」

「わかりました。さあ、行きましよう。高次様を待たせすぎるのはよくありません。」

二人は車へと足を運んだ。

移動中、三人は一言も言葉を発しなかった。三人の間を重い空気が漂うだけだった。

獄舎。

京極兼昌と言う男は薄暗い、湿気に満ちた獄中の中で静かに座っていた。出来る限り身形をしっかりと整えてうつむいて座っていた。

「京極兼昌様ですね。」

一識は尋ねた。

「いかにも。私が京極兼昌です。」

兼昌は静かに答えた。

「お話を伺ってよろしいですか。」

「その前に、高次と話をさせて欲しい。」

「わかりました。今、連れてきます。」

一識と正頼はその場を後にした。

そして、入れ替わりに高次が姿を現した。高次は兄をじっと見

つめた。兼昌も高次を見た。

「兄上……。」

「高次……。」

「兄上。嘘ですよ。兄上のような方が、あんな残虐な人殺しなどなさるはずがない。嘘といって下さい。私たちが何とか無実を証明します。」

「私は満月鬼などではない。しかし……。無実を証明することは出来はしない。いや、して欲しくない。実は、今日はそれを頼もうと思ったんだ。高次、私の無実は決して証明するな。」

「何を言っているんです。兄上。無実なのにこのまま罪を被るというのですか。一体どうして。」

「高次、お前私の妻の飛鳥を知っているだろう。」

「はい、一度お会いしただけですけど。」

「前に飛鳥の人柄について話したことがあつただろう。」

「はい。嫉妬深い方だと……。」

「飛鳥の嫉妬深さは生半可なものじゃあない。前にあの女はその嫉妬心の強さから私の愛人を殺したことですらあるんだ。」

「それと、この事件になにが関係あるのですか。」

「高次……。私には今とても大切な人がいるんだ。妻の飛鳥ではないが……。」

「愛人がいるのですか。」

「ああ、無実を証明すれば飛鳥に愛人の存在がばれてしまう。そうすれば、飛鳥は私の愛人を殺すに違いない。それは、困る。それなら、私は死んだほうがましだ。」

「では、兄上は姉上より愛人を愛しているというのですか。」

兼昌は一度、俯いたがすぐに顔を起こし真っ直ぐに高次を見て言った。

「そうだ。」

高次は兄のその言葉が信じられなかった。

「どっ、どっして……。」

「高次、人の心は時が過ぎることに変化していくものだ。人の心に不変などありはしない。」

兼昌は淡々と語った。

「では、何故、兄上は離縁しようとは考えないのですか。もう、愛していないのでしょうか。」

「愛していないのに、夫婦でいるのは情があるからだ。それに、飛鳥には私しかない。あの女には私以外に身よりも無い一人身。そして、何よりあの女はいつまでたっても、変わらず私を想ってくれている。こんな一途な女を無慈悲に捨てることは私にはできない。」

高次どうか私のことは忘れてくれ。そして、無実を証明しようとはしないでくれ。このままの状態で私が死ねば全ては円満に解決する。」

「どうしてです。兄上が死んでしまつては、姉上は深い悲しみのなか一人身になるのですよ。」

「このほうがいいんだ。このまま終われば、飛鳥は私の再びの浮気に傷つくことも無く私の生涯一人の妻として、私の置き土産でこれからも不自由なく、暮らしていける。そして、私も自分の愛を貫いて死ぬことができる。常盤姫を守ること……。それなら本望だから、このまま死なせてくれ。」

高次が何もいえなかつた。静かに兄を見ているしかなかった。

もう、兄の決意は揺らぎようが無いのだと感じた。

「わかりました……。」

「ありがとう。藤原一識様にもそうお伝えしてくれ。何もしなくていいと。そして、これを飛鳥に渡してくれ。」

そういつて、兼昌は懐から数珠を取り出して高次に渡した。

「飛鳥に私だと想つて大切にしてくれ。といつてくれ。」

「わかりました。必ず……。」

「さあ、行くんだ。長居はわかれを辛くさせる。」

そういつて、兼昌は高次の頬を伝う静かな涙を拭った。そして、兼昌の頬にも一筋の涙が流れていた。

「兄上……。」

「身体を大事にしるよ……。」

高次は兼昌の眼をしばらくしっかりと見つめて、頭を深々と下げ、兼昌のもとを去った。

「どうして……。」

一識は言った。

高次は泣くのを必死にこらえて言った。

「兄上の願いだ。受け入れて欲しい。」

「どうしてだ。おい、高次いいのか。このまま指をくわえて兄上が死ぬのを見ていいいいのか。無実を証明出来るんだろう。なんで、どうしてだよ。理由を聞かせてくれよ。」

一識は高次を揺さぶり語調を強くして言った。

「お兄様には無実を証明されては死んだほうがいいと思う程の困ることがあるのですか。」

正頼が口調柔らかかに、子供に尋ねるように聞いた。

高次は下を向いて感情を殺すように言った。

「そうだ。だから、頼む。もう兄上の望むようにしてくれないか。」

「お前それでいいのか。」

一識は高次から手を離していった。

高次は涙を流しながら首を立てに振った。

「それが、兄上の望むことだ。私にはどうすることもできない。」

数日後、京極兼昌処刑の日。

高次と一識と正頼は兼昌の最期を見届けるため処刑の場に姿を現した。しかし、兼昌の妻、飛鳥の姿は無かった。

義姉の死

そして、その時は静かにやってきた。兼昌の胴と首は真赤な血飛沫をあげて離れた。

高次はしつかりとその時を見届け、二人を促しそそくさとその場を後にした。

「すまないが、飛鳥姫様のところへ寄っていいかな。」

高次が聞いた。

「ああ。」

「構いませんよ。」

三人は牛車に乗り飛鳥姫の元へ向かった。

飛鳥姫のいる兼昌の屋敷の門は大きく開け放たれていた。そして、様子がおかしかった。

高次は牛車から飛び降り、屋敷に駆け込み大声で飛鳥の名前を叫んだ。

「飛鳥姫様！飛鳥姫様！」

高次は屋敷に入った瞬間から、何かが燃えている音と煙の臭いを感じずにはいられなかった。それは、高次の不安を増幅させた。

屋敷は何もなく閑散としていた。ただ何も無い空間に美しい御簾が風に靡くだけだった。

「高次！」

高次は背後からの女性の掛け声に足を止めた。そして後ろを振り返った。聞き覚えのある声だった。とても親しい友の声。

「望……。姉上を知らないか。心配で仕方ないんだ。」

望は高次に悲しい眼を向けた。

「案内しよう。」

望は高次を飛鳥姫のところへ案内した。

「姉上……。そんな……。」

その光景はあまりにもつらい光景だった。庭ではこの屋敷のあ

つたと思われるものすべてが燃えている最中だった。そして、部屋には血を吐いてすでに息を引き取った飛鳥姫がうつ伏せに倒れていた。右手には一枚の美しい桜色の紙が握られていた。

「姉上……。」

高次は飛鳥姫の元に座り、やさしく開いていた飛鳥姫の目を閉じた。そして、右手に握られた紙を取った。そして、高次の眼からははらはらと涙がこぼれた。

「姉上はこんなにも兄上を想っていらつしやったのか……。」

そう言つて、高次は紙を飛鳥姫の元に返した。高次は涙を拭いて、立ち上がった。そして、望の方を一瞬見て部屋を後にした。それと入れ替わりに一識と正頼が駆け込んできた。二人は部屋の光景を見るなり息を呑んだ。

「なんとということだ……。」

一識は呟いた。そして、望をみた。

「来ていたのか。いつたいてどこにいるんだ望。」

「兼昌様は無実だ。それを、飛鳥姫様に伝えるきたんだ。しかし、時すでに遅しだった。」

「まさか、兼昌様の愛人のぞんざいを……。」

「愛人など私は知らない。でも、私は無実であることを知っていた。」

「どうして、無実だと知っていた。」

望は二人に背を向けて言った。

「伝えなければならぬ本人が死んだ今。もう、誰にも話す必要はない。」

そう言つて、望は二人の前から姿を消した。

そして、二人も屋敷を後にした。

こうして、京都の都を震撼させた満月鬼の事件は四人を除いて解決された。

眞実

夜。高次の屋敷。

そこには高次と望の姿があつた。

「大丈夫か。高次。」

「望……。ありがとう。私は姉上が握っていた兄上からの文を見て。申し訳なくなつてしまった。」

「そうか。」

「姉上が持っていたのは兄上が姉上に渡した求婚の歌だつたんだ。

姉上はとても兄上を愛していてくれていたんだ。それなのに兄上は……。」

「きつと、人はそれぞれなんだ。一途に誰かを想つていられる人もいれば、他の誰かを想うことでその者への想いを強くする者もいる。そして、一途になれない者もいる。しかし、高次。お前の兄上はけつして飛鳥姫を愛していなかつたわけじゃない。いや、とても愛していた。だからこそ私は飛鳥に無実を証明しにいったんだ。ただ、口には出さなかつただけだ。」

「無実を証明……。。」

「ああ、飛鳥姫様は重い病を患つていて、余命いくばくもなかつた。一日でもいいから生きて欲しいという気持から兼昌様はあの日の前日、私の元に来て何か良い方法はないかと相談にこられたんだ。そこで私は船岡山に満月の夜にだけ咲く延命草という稀な植物があるとお教えした。」

「そうか、あの日兄上はそれを探しにいったのか。でも、それなら公にも説明できたんじゃないか……。」

「おそらく、兼昌様はその愛人の屋敷に行つてから船岡山にいったんだろう。それに、人目の無い船岡山にいたといつても、無実を証明する理由にはならない。だが、飛鳥姫様にはそれだけで無実の証明になる。だから、私は今日、屋敷に行つたんだ。」

「そうか……。」

「兼昌様は飛鳥姫様をとても大切に想っていらっしやった。」
それを聞いた高次は身を伏して大声をあげて泣いた。

その時、一識の屋敷

そこには一識と正頼の姿があった。二人の雰囲気は重かった。

最初に口を開いたのは一識だった。

「兼昌様のためにも絶対に真犯人を見つけろんだ。私たちの手で……。」
「ええ。」

高次の屋敷

高次は伏していた身体を起こし涙で真赤な顔を望に向けた。

「私は決して、満月鬼を許さない。いつかきつと探し出してみせる。協力してくれるか。望……。」

「勿論だ。」

望はやさしい表情でいった。

「ところで、望。きみに一つ聞きたいことがあるんだ。」
「何だ。」

一識の屋敷

「正頼殿一つお聞きしたいことがある。」

「何でしょう。」

「望殿とはいったいどういう関係なのか教えてくれないか。」

高次の屋敷

「正頼殿とは一体どういう関係なのか話してほしい。」
望は庭の遠くを見た。

正頼はかしまった顔をして一識を見た。

「私たちは元夫婦です。」

「正頼は私の元夫だ。」

正頼ははつきりと、望は呟くように言った。

過去

高次の屋敷。

高次は驚いた。和葉の姫の女の勘があたっていたのである。

「和葉の姫殿の勘が当たった。本当なのか望。」

「ああ。真実だ。」

「でも、どうして……。離縁したんだ。」

「……。」

望は表情をいつも道理の冷たく引き締まった状態に直し、何も言わず、立ち上がった。

「急な仕事を思い出した。失礼する。」

そう言って望は高次の前を去った。

一識の屋敷

「そうだったのか。でも、一体何故別れてしまったんだ。」

正頼は一口酒を飲むと、くすりと小さく笑い口を開いた。

「さあ、それが私にも理由はわからないのです。ある日突然、別れてほしいと言われて、理由を尋ねても答えてはくれませんでした。ただ……。」

「ただ？」

「泣いていました。私にすまないといわんばかりの顔をして……。きつと、私にも言えない重大な事情があつたんだと思います。だから、私も何も言わず別れました。」

「そうか……。正頼殿は今でも望のことを……。」

「大切に思っています。何よりも……。」

「話をしてくれてありがとう。」

「いいえ、いつか話そうと思ってましたから。」

そう言って正頼はやさしく穏やかに微笑んだ。

「正頼殿……。」

「はい。」

「望とちゃんと話をしたいか。」

「できれば……。でも、そつとしておいてあげたいのです。だから、私たちにはあまり構わないで下さい。お気持だけで……。」

そう言つて、正頼は頭を下げた。

「そうか……。」

一週間後……。

正頼と高次は突然一識の屋敷に呼び出された。

一識はとても焦つた様子だった。

「どうしたんだ一識。そんなに慌てて……。」

「何かあつたんですか。」

一識は二人の前に一冊の本を置いた。それはとても古ぼけた誰も手をつけないような本だった。

「おれはずつと気になつていたんだ。あの夜聞いた満月鬼の歌が……。それに関する記述をさがして本を読みあさつていた。そして、わかつたんだ。」

「それは、犯人がわかつたつて事か。」

高次が身を乗り出して聞いた。

「まずは歌の意味だ。歌はこうだ……。栄華を極めし時はすぎ、手元の天球、今はなし。吾らは篡奪を許す事、永久になし……。満月の夜、刃は踊り、血は桜吹雪に変わり、荒山の墓は喜び勇む。吾は満月鬼なり……。満月鬼……。参上……。」

栄華を極めし時はすぎ、これをとばして、手元の天球。この天球という意味だ、これは権力を意味する。今は帝が持つ力だ。今はなし、と言うことは過去ずっと。はるか昔にこの大和の朝廷が出来る前に天球に権力をもつていたことを意味する。

吾らは篡奪を許す事、永久になし。は吾らはといつているからおそろく一族のことだろう。そして、篡奪を許すこと、永久になし。こ

れからこの一族は権力争いに敗れ没落していった。そして、恨みを持ちつづけているということの意味する。これらのことがこの国の過去にないかと調べていたんだ。そして……。」

「この書物に書いていたということですか。」
正頼が言った。

「ああ。そうだ。それに、歌の後半に「荒山の墓」という言葉からおそらく山ほどの大きさの墓ということから大きな一族だったのだろう。だが、はるか昔の伝説に近いころの出来事だったからなかなか見つからなかったんだ。この書物にも走り書き程度にしか書かれてなかった。」

「それで、いったいどうなんだ。」
「落ち着け高次。この書物にはこう書かれていた。はるかむかし吉野一帯を支配しているある一族がいた。その一族は呪術を得意として強大な力を持って支配をしていた。記述ではその一族が一番最初に天球を持っていた一族らしい。天球の力を受けた一族は瞬く間に国を拡大し、最強の国となった。しかし、ある時天球を持っている一族の長の妻が、天球を敵対する一族に渡した。そして、一族は衰退し、敵対する一族は権力を欲しいままにして繁栄を極めた。そして、その衰退した一族はこの世に激しい恨みを抱き、最強の怨霊族となったと、この書物には記されていた。」

「ですが、それだけでは……。」
正頼が言った。

「そうだ。それだけでは何にもならない。だから、私はその書物に名前が記されていたたった一人の衰退した一族の男について調べたんだ。その男の名は安紀伊童彦^{やすきのたつひこ}。この男についてのことは他の書物には一っただけ記されていた。そして、それから一っつ一っつ辿っていった。そして、現在もこの一族の末裔は生きていることが解った。そして、その一族の末裔が満月鬼である証拠も同時にわかったんだ。」

「それで、一体誰なんだ。じらすなよ。」
高次がいった。

「さて、順をおつて話さないとこれは重大な事なんだ。いいか、安紀伊 竜彦は天球を持っていた最期の男だ。そしてこの男は裏切られた妻との間にできた三人の子供と共に武蔵に身を隠した。そしてこの大和朝廷の礎ができ始める頃この一族は臣下となった。素性を隠し、名を変えてな。その時の苗字はのりやす（紀安）。そして、何度も帝暗殺の謀略を企てている。しかし、すべて失敗に終わり、一族の首謀者は次々に処刑され、三度目の謀略失敗の時はついには一族すべてが追放された。追放を受けた一族は失敗の悔しさを胸に抱き、消えるように東北にむかった。そして、桓武帝の御世の時また、名を変えて今度は陰陽師として長岡京にやってきた。そして、あの事件に関わっていたんだ。桓武帝を遷都に追いやった事件に……。」

「早良親王の怨霊事件ですか……。」

正頼が言った。

「ああ、そして、その後も、何度も事件を起こしているが失敗している。そして、一族は減りに減り、現在ではたったの一人……。」

「誰なんだよ！教えてくれ。」

高次は床を叩いていった。

「まさか……。」

正頼は予想がついているようだった。

「その一族の苗字は安。そして、たった一人の末裔。つまり……。望だ。」

「そ、そんな……。」

高次は凍った。高次は信じられなかった。自分の大事な友がこの一連の残虐な殺人事件の犯人だなんて。高次は一識に怒りを抱いた。それをぶつけようとした時だった。

「確かに、そうかもしれません。」

望の妹、瑠璃香姫

正頼は小さく咳くように言った。

「ですが一識様、望はたった一人の末裔ではありません。望には一人、妹がいます。瑠璃香姫という妹です。」

「あつたことがあるのですか。」

一識が尋ねた。

「いいえ、ただ一度、望と瑠璃香姫が話をしているところを見たことがありません。」

「一体何を話していたのですか。」

「そつ、それは……。いえません。」

正頼の顔がはげしく歪んだ。それは、なにかに耐えているようだった。

一識は正頼の肩をつかんだ。正頼をじつと見つめていった。

「言つて下さい。もしここで望が満月鬼だとわかつて、ここで望の身柄を確保できたら、望を助けられるかもしれない。しかし、もしここで確保できなかつたら、きつと帝を殺すぞ。そうすればもう助けられない。俺達は助けたいんだ。望は俺達の大事な友だから……。頼む正頼殿はなしてくれ。」

「ちよつと待てよ。」

高次は床を思いつき叩いて言った。

「さつきからきてれば、はなから望が犯人のように言ってるじゃないか。一識、おまえいつから友を疑うような人間になったんだよ。望がやったという確証は何一つないのに、過去の一族の者達のしわざから、犯人だと疑うなんて……。見損なつたよ。正頼殿……。今でも想いを寄せている女性なのになんであなたまで……。俺は信じないぞ。望が満月鬼だなんて……。絶対信じるもんか！望は俺に約束してくれた。絶対に共に満月鬼を捕まえると。おれは友を疑つたりしない……。」

「高次様……。聞いて下さい。私が聞いた会話はこうです……。」

正頼は語り始めた……。

五年前……。

真夜中、この日正頼は仕事が遅くなり帰宅が深夜になってしまった。この時正頼は望の屋敷に住んでいた。もう望も妹の瑠璃香姫も寝てしまっただろうと思い、静かに廊下を歩いていたら時だった。ちょうど瑠璃香姫の部屋を通りかかろうとしたところだった。

「うるたえているのですか。姉上。」

瑠璃香姫の声だった。声色はひどく怒っているようだった。

正頼は立ち止まった。そして柱の陰にいき、身を低くして話を聞くことにした。

「何千年もたった今、我が一族もお前を入れたとしてもたった二人なのにもう、執着する理由もないだろう。」

望の声だった。

「何を言っているのです姉上！姉上は何故ここにいるのかわかっているのですか。今、やっと吾らのぞみが叶おうとしている時なのですよ。姉上は一族のぞみをかなえる最期の切り札なのですよ。何のために父上が命をかけて赤子の内親王を攫い、そして、姉上にその内親王の身体をお与えになったのか、わかつているのですか。」

「それは父上が勝手にやったことだ。元々私にはちゃんと身体があった。それを勝手に父上がすりかえてしまったただけだ。」

「そのお陰で玉座の結界を受けることなく、その気になればいつでもあの男を殺し、天球を取り戻すことが出来るのですよ。一族の努力を無にしてはなりません。」

「ここで、帝を殺しても何にもならないか。もう、時間がたちすぎている。もはや、こんな争い無意味だ。」

「ははははは。姉上、気が狂われたか。もう無意味？戯けたことを……。やっぱり姉上はおかしくなられた。あの男のせいですか。姉上、そもそも何故、あの男と結婚などしたのです。」

「私はもうこんなことしたくない。正頼と共に人間らしく穏やかに暮らしたいんだ。」

「そんなことは許しません。やはり、あの男のせいですね。姉上はすっかり弱腰になられた。あの、美しく冷酷な鬼のような姉上はどこへ行ったのですか。それもこれもあの男の存在のせいならば。私はあの男を殺します。」

「何をいつているんだ。そんなこと許さない。」

「では、やるべきことをなさって下さい。いいですか、姉上。姉上の身体はわれら一族の物。姉上の物ではないのですよ。われらの言う通りになさらないければ、いつでも姉上の御魂をその身体から離し、私とその身体にはいり正頼を殺し、帝を殺しに行っても良いのですよ。もし、正頼を生かしたいのであれば、私たちの、のぞみを叶えるのです。」

「……。」

「姉上！」

「わかった。」

「天球は我が一族の物なのです。絶対に取り戻すのです。」

「この会話はずっと誰にも言わず、隠し通すつもりでした。でも、一識様が望を助けるためだとおっしゃったのでお話しました。高次様、望はこんなことしたくないって思っているんです。でも、望だけの力ではもうどう仕様も無いのだとおもいます。望を助けるためにも、私たちの手で内密に捕まえましょう。」

「わかった……。でも、俺は信じないぞ。望が犯人だなんて……。きつと間違いに決まってる。」

高次は言った。

「それじゃあ、明日の夜、望をここに連れてきてくれ高次。」

一識が言った。

「わかった。」

高次は祈るようなきもちだった。

満月鬼の正体

次の日 夜 一識の屋敷

一識、高次、正頼を前にして望は涼しそうに凜とした態度で向き合っていた。四人の間の空気はとても張り詰めていた。その均衡を破ったのは一識だった。

「望……。」

「どうした。そんな改まって……。満月鬼の正体でもわかったのか。」

望は冗談のようにくすりと笑って言った。望の表情はいつもより豊かで安心と温かみに溢れていた。気まづく暗くなっている三人とは正反対だった。

一識は身が引きちぎられる思いと共に焦っていた。

「その通りだ。」

「そうか……。ん！」

その時だった。暗闇の中から弓矢が四人めがけ飛んできた。そしてそれは一識をかすめて壁に突き刺さった。

「何者！」

望は持つてきていた剣を抜き言い放った。

すると、闇の中から独りの男が姿を現した。男は顔を仮面で覆っていた。そして、右手には光り輝く刀を持っていた。

高次も剣を抜き、望の隣で構えた。

「満月鬼だ……。。」

望が小声で言った。

「やっぱりな……。。」

高次は安心したように言った。

「高次、頼みがある。」

望が小声で言う、それを高次も小声で答える。

「何だ。」

「一識と正頼をつれて右大臣様の屋敷へ行ってくれ……。そして、満月鬼が現われた。と、そして捕まえたと言いに行ってくれ。」

「待て、お前はとうするのだ。」

「私が何とかかまえる。お前は二人を連れて行ってくれ。」

「そんなこと危険すぎる。させられない。」

「頼む、行ってくれ。ここは私に任せてくれ。」

「嫌だ。」

「行くんだ。」

「嫌だ。」

「行け！」

望は怒鳴りつけた。それを聞いて高次は渋々剣を納めて二人を屋敷の外へいざなった。

「望、決して無理をしないで。」

正頼は望にそう言っつて屋敷を後にした。

三人が屋敷を後にすると、望は剣を納めた。そして、男も刀を納めた。

男は望の前まで足を進めた。そして、男は仮面を取った。

「何しにきた。瑠璃香。自分が何をしているのかわかっているのか。」

仮面をしている男の正体は女だった。そう、望の妹瑠璃香だった。

瑠璃香は鋭い目つきで望を見た。そして、結えていた髪をほどいて言った。

「姉上こそ。馬鹿なことをなさろうとしていた。一体何を考えていたのです。」

「瑠璃香。もう、満月鬼は終りだ。こんどこそ、私は止める。瑠璃香お前の身体も元に戻す。」

「そんなことは許しません。姉上。帝を殺すなら今です。いや、今しかないですよ！どんなことをしても使命をまっとうしてもらいますよ。」

「嫌だ。」

「望……。」

望は声を聞いて驚いた。

「正頼、どうして、ここに。」

それは、正頼だった。正頼は二人の部屋の入り口で会話を聞いていたのだった。

正頼はあの後一人で望を助けるべく、引き返したのであった。

「おのれ、またお前か。もう許せぬ！殺してやる！」

そう言っつて瑠璃香姫は阿修羅のような凄まじい表情で正頼を睨み呪文を唱えた。

「やめろ！瑠璃香！！」

望はすぐさま反対呪文を唱えたが時すでに遅し、正頼は瑠璃香の呪文によって倒れてしまった。

望はすぐさま正頼を抱きかかえた。そして、何度も正頼の名を呼び、肩を揺さぶった。

「なんて事をしたんだ。瑠璃香！」

「助けたければ、使命を果たすのです。帝を殺すのです。」

望はぐったりと倒れる正頼の顔を見て望はしばらく考えた。そして、決断した。

「帝を殺せばいいんだな。わかった。その代り絶対に一識と高次と正頼には一切手出しするな。」

「文句ございませんわ。天球さえ取り戻してくださいさるなら。」

その瑠璃香姫の表情は悪意の塊でしかなかった。望は瑠璃香姫は自分の望みを聞き入れる気など、さらさら無いと感じた。

いざ、清涼殿へ

三時間後……。

高次と一識はやっとのことで右大臣を見つけ出し、検非違使をつれて屋敷についた。

「望!!!」

高次は勢い良く屋敷に入った。そして、その後に一識は続いた。一識は考えていた。なぜ、望が満月鬼ではないのか。そんなはずは無いと思っていた。しかし、現実に満月鬼は四人の前に姿を現した。初めて望と満月鬼に遭遇した時のように。しかし、望は陰陽師何らかの方法でこのような事をするのも可能である。一識は望が一体何を考えているのか解らなかった。

「おい、一識……。これは一体どういうことだ……。」

彼らの目の前には誰もいない庭だけが映っていた。

「どういうことだ一識。満月鬼を捕まえたのではないのか。」

右大臣が威厳たつぷりに一識と高次を睨み言った。

たじろく高次をしりめに一識はあるものを見つけた。

それはすのこの上にあつた。一識はそれを拾った。そして、それを握り締めた。

「高次、清涼殿に行くぞ。父上、安望の屋敷に行き望を捕えて下さい。詳しくは後ほど話しますがあの者は帝を今夜、殺す気です。」

一識は高次の手を引き、牛車に乗った。

「一体どういうことだ。一識。」

「さつき俺が拾った紙にはな、天球は今、還る。と記されていたんだ。正頼殿はおそらく望の元にいる。そして、さつき俺達の前に現われた満月鬼は瑠璃香姫だ。そして、瑠璃香姫が望にすべての行動をさせているんだ。望はおそらく正頼殿を瑠璃香姫に握られている。望は瑠璃香姫に脅され仕方なく……。」

「だったら、望の屋敷に行つて、瑠璃香姫を捕まえて、望を俺たち

でかくまった方がいいんじゃないか。」

「もう、遅いさ。望はもう清涼殿に向っているよ。それだったら、父上と検非違使は望の屋敷にやって、俺達だけで望を捕まえて、隙を見て逃がしたほうがいい。」

「しかし、そんなことできるのか……。」「
「やらなきゃいけないんだ。」

その時だった。蹄の音と一緒に二人の名前を叫ぶ声が聞えた。

「一識様！高次様！」

一識は御簾を上げて声の主を探した。

それは正頼だった。正頼が馬に乗り二人の跡をついてきたのだ
った。

「正頼殿。無事であったか。よかった。」

「望は清涼殿に向いました。急いで下さい！望はこんなこと望んで
ないんです！誰かに止めてくれるよう願っているんです！」

「わかってる。だから、今、清涼殿に向ってるところだ。さあ、行
こう。」

「私は、この馬で先に行きます。」

そう言って、正頼は勢い良く走っていった。

「あつ、正頼殿！」

一識も先に進んだ。

本心

二時間前、望の屋敷。

正頼は虚ろながら意識を取り戻した。そして、目の前には望がいた。ひどくやつれている様子だった。

「のっ、望？」

起き上がるうとする正頼を望は制した。

「駄目だ。まだ、術が効いている。動いたらまた気を失う。」

正頼は力を抜いて横たわった。そして、静かに望を見つめた。

「どうして、戻ってきたりしたんだ。」

望は正頼の頬を一撫でして尋ねた。その眼からは涙がこぼれていた。

その手を握り、正頼は答えた。

「君を守りたかった。」

「そんなことしなくていいのに……。仮にも私はお前を冷酷にも捨てた女だぞ。そんな女に……。お前は本当馬鹿だな。」

正頼はその声を聞いて、温かく微笑んだ。すべてを包み込むような温かい微笑だった。

「今から、お前を逃がす。いいか正頼。よく聞くんた。術が解けたら急いで裏口からでて、一識たちの元へ向え。そして、清涼殿に行くよう言え。そして、この矢で私を射殺せ。この矢には強い呪がかかってる。これで、私を殺してくれ。」

「できない……。」

「これが、最良の方法だ。私もお前達の手によって死ぬるならこの上ない喜びだ。」

そう言つて、望は正頼に矢を握らせた。

正頼はその矢を放した。それをまた望が握らせて言った。

「これが、私の望みなんだ。お前の手で私を殺してくれ。頼む。もう、私は生きていることは許されない身の上なのだから。」

そういつて、望は正頼に矢を握らせ手を離した。
「わかった。」

正頼は呟くようにいった。
「今から、術を解く。」

望は正頼の額に指を当て呪文を唱えた。すると、正頼の身体から邪悪なヘビが現われた。望はそれを持っていた剣で切り殺した。そして、正頼を起こした。

「行け。」

「その前に、一つだけ聞きたい。」

「何故、離縁してほしいとあったか。ということか。」

「ああ。」

「あの時、瑠璃香はお前を殺そうとしていた。だが、瑠璃香を殺すこともできないし、突き放すこともできなかった。でも、お前を守りたかった。それに、満月鬼である以上、お前を悲しませるのは避けられない。そんなのはいやだった。だから……。」

望は涙が止まらなくなり、言葉が出なくなった。そして、床に膝をついてしまった。

そんな望を正頼は寄り添い、やさしく抱きしめた。そして、やさしく言った。

「そうだったのか……。話してくれて嬉しいよ。ありがとう。」

望は正頼の胸に縋って言った。

「私は決して、お前を嫌いでいる時など今まで一瞬たりとも無かった。いつも、お前への罪の気持と押さえようのない愛おしさで一杯だった。許してくれ！正頼……。」

「私だって一緒だ。君を想わない日なんて一日だってなかった。こうして、お互い再びわかり合えてよかった。望、愛している。」
「私もだ。さあ、いってくれ。」

そう言つて、二人は互いをしばらく見詰め合い、望は屋敷の内
部へ、正頼は裏口へ向つた。

望が瑠璃香の部屋へ向う途中だった。庭先から、瑠璃香が現わ

れた。瑠璃香は般若のように目を吊り上げ望を睨みつけていった。

「姉上には失望したわ!」

望は無表情に瑠璃香を見た。

「帝は必ず殺す。それなら良いだろう。」

「誠か?」

「ああ、それが、我が一族の長年の願いだろ。」

「そうです。ですが、もう、姉上でなくても良いのですよ。姉上はまた裏切るやも知れぬ。だから、私が変わりにやります。」

「もう、私には用はないと……。言うことが。」

「ええ、そうでございます。」

「それは、丁度いい。私もそなたを元に戻そうと思っていた所だ。丁度良かった。」

そう言って、望は身構えた。

「なにをやっても無駄でございますよ。姉上。私には一族の偉大なる方々がいるのですから。」

そう言くと瑠璃香の背後にある月に次々と人影が浮かび上がりそれが一つになり瑠璃香の背後にたった。そして、瑠璃香と一つになった。

「いつの間に……。」

望は呟いた。そして、望は呪文を唱えた。すると、竜巻が起こり、その中に一人の女性が現われた。そして、その女性は持っている羽衣で瑠璃香を縛った。

しかし、瑠璃香の表情は一つも変わらない。それどころか笑っている。

「こんなもの、くすぐったいだけじゃ!」

そう言くと、羽衣の女は吹き飛ばされ、望も吹き飛ばされた。そして、壁にぶつかった。

「さすが、一族の力を受けてるだけある。ものすごいな。」

望はくすりと笑い懐から呪符をとりだし、呪文を唱えて呪符を投げた。

すると、呪符は瑠璃香の額に張り付き瑠璃香を吸い込み始めた。

「なに！吾を封印する気か？」

「そうだ！お前を封印する。」

「そのようなことさせぬわ！」

瑠璃香から発せられた声は、男の声だった。そして、瑠璃香は呪符を取り上げそれを望に投げ返した。すると、望の額に呪符が張り付き、望は身動き取れなくなってしまった。すると、瑠璃香は黒い霧となり望に迫った。そして、望に入り込んでしまった。

「天球は……。今、我が一族の手に。」

青鬼

清涼殿

夜も更け皆そろそろ寝静まろうとしているところだった。

時の帝は琵琶を抱えつきを眺めていた。美しい満月が真っ黒な夜空という湖に煌々とひかり浮かんでいる。

「いつ見ても美しい月だ。」

その月に聞かせるようにゆっくりと琵琶を鳴らす。

風は冷たかったが、それが余計に月の美しさを際立たせるようだった。

ふと、少し強い風が帝の頬を通り過ぎたときだった。

帝は琵琶を止め正面を見た。

「珍しいな、お前から来るとは……。」

「あまりにも月が美しすぎて、あなたを思い出したので耐えかねて……。」

その声の主は女だった。帝の横にそつと控えていた。

細い体に、漆黒の川のような黒髪、そしてその容姿はとてもはかないものを感じさせるい顔だった。

帝は女と目を合わせることもなく琵琶を抱えて月を見る。

「お前が私の元を去ってもう何年たつだろうか……。お互い、見目形も、心も変わってしまった……。お前の言つとおりだな。人の心に普遍などありはしない。」

「そうですね。いまやあなたは現人神に、あの親王からずいぶんと変わられた。人の心は移り変わるからこそ、奇跡があるのですよ。こうして私があるの元へ戻ってきたように……。」

「変わる心もあればそうでない心もある……。月を見たときの心は今も昔も変わらんさ。」

そういつて帝は琵琶をべんと一度鳴らして口を開いた。

「時が来たのだな……。」

「本来の場所へ戻すだけでございます。」

「やりたければやるがいい。」

女は一瞬にして青い炎に包まれ、そして、鬼となった。口からは青い炎がひゆるひゆると吐かれ、つめは鋭く、瞳は真つ青で目が釣りあがっていた。

そして鬼は帝に襲い掛かった。しかし、帝に触れようとした瞬間、帝の周りを何かか包み込み鬼は大きく吹き飛ばされてしまった。

帝は琵琶をまざまざと見る。琵琶は赤く光を放ち帝をその光で包み

込む。

鬼は倒れてすぐに立ち上がった、しかし、鬼の姿は立ち上がったが、鬼と分離した望の体が横たわったままだった。

鬼は倒れている望の姿をみて驚いた。

「なっ！！何事！！おまえその琵琶に何をした！！」

鬼は青い炎を吐きながら帝に言った。

帝は何も言わず琵琶をはじめた。すると音の波が鬼に襲い掛かった。鬼は耳をふさぎ吹き飛ばされた。

帝は琵琶をとめずなんども鳴らす。次第に鬼は苦しみをまし、その身を小さくさせてゆく。

そして鬼は消え去ってしまった。

帝は琵琶をはじめくのを止め、懐から古ぼけた札を貼り、琵琶を置いて望のもとへ行った。

帝は望を抱きかかえた。

「望、もう終わったぞ。」

するとゆっくりと望が目をあける。

満月鬼

「私の言葉を覚えていてくださったのですね……。あの琵琶と、札をいつも持っていてくださったのですね。」

「ああ、いったらう。月を見るときの心はいまも変わらないって。」

望は立ち上がり庭におり、帝にひれ伏した。

「謀反人に処罰を……。」

帝はそつと微笑んで言った。

「西へ行け……。遠い遠い西へ、正頼と二人で。」

望が帝の顔を見た瞬間だった。

稲妻が二人の間に落ちた。そして、雲が現れ、嵐のように雨が暴れだした。

「望、何事だ……。」

しかし望の返事はない。

そして、どこからともなく声が聞こえてくる。

「天球はわれら一族のもの、いまここにて返してもらおう。」

その声は言い終わると稲妻が走り、それが琵琶に落ちた。その瞬間、琵琶から青い炎が現れ望を包んだ。望は炎に包まれた瞬間目を覚ました。

満月鬼

「帝!!逃げてください!!」

「望!!!!」

炎が望のなかに消え去りそして、そこには望ではなく瑠璃香がいた。

瑠璃香は一步一步ゆっくり帝に近寄った。そして、次の瞬間、瑠璃香の手には刀が握られ、瑠璃香は思いつきり振りかぶった。

「死ね!!!」

帝は間一髪で刀をよけた。そして走り出した。

瑠璃香はその後ろ姿をみて大声をだして笑った。

「逃げるがいい。しかし、お前に逃げ場はない。必ず私が殺す!!!」

そういつて瑠璃香は刀を突き立てた。

記憶

正頼は朱雀門の前に立っていた。

正頼は手に握られている弓矢を見た。

自分に彼女を殺すことができるのか……。

正頼は望との過去を思い出した。

〈数年前〉

正頼は右大臣の元に仕え始めたばかりの若い青年だった。成人して間もなく頼りなさがあふれる青年だった。

しかし、その穏やかな笑顔とやさしさはかわらなかった。

そして、二人が出会ったのは宮中だった。

当時、望は陰陽寮の陰陽師ではなく宮中の巫女として親王や女子たちの世話をしていた。

そして望は時の帝の五男の瑞季親王と恋仲だと有名だった。

出会いは突然だった。宮中に不慣れな正頼が道に迷って道を聞いたのがきっかけだった。

望は美しい女性ではあったがとても無表情で冷たい女だった。そのため宮中では美しいと、同時にあまり評判のいい女ではなかった。

しかし、正頼は道に迷い助けてもらって以来、望を見かけるたびに声をかけた。

最初は無視する望だったが、いつまでもやめない正頼に興味を持ったのかある日庭の小鳥を眺める正頼に声をかけた。

それが二人が打ち解けてゆく始まりだった。

正頼は望に恋をした。そして、望も正頼に引き寄せられていた。

二人はたびたび会い、話をするようになった。

しかし、これを知った瑞季親王は黙ってはいなかった。

瑞季親王と望の仲は作られた仲だった。

しかし、なぜこのようなことになったのかは誰も知らなかった。

それを知っているのは望と瑞季親王そして親王の父、帝の三人だけだった。

望は瑞季親王のことを愛してはいなかったが唯一心を許している人間だった。

瑞季親王はというと望のことを愛していた。

望と正頼の仲を知るや否や瑞季親王は望に正頼にあつなと言った。

望はわざわざ会うことはしなくなった。望は自分は瑞季親王の下で

一生を終えるとわかっていたからだ。

たとえそれが望の望まないことでも。

しかし、二人の仲はこれで終わることはなかった。

望が瑞季親王と一生を終える条件は親王が帝にならない場合だけだった。

そう、逆に親王が帝になることになった場合、二人は決して一緒になつてはならないことになっていた。

そして、現実はその方向へむき出したのだ。

東宮の座をめぐる争いが始まったのだ。争いのきっかけは長男の東宮の突然の出家だった。

一人の女との恋に狂い、恋人の死の衝撃から東宮は誰にも言わず突然出家してしまったのである。

これに落胆した帝は次の東宮を兄弟の順では決めないと言い出したのだ。

親王たちには野心たっぷりな貴族たちがそれぞれにつき始め東宮の地位をめぐる争いが始まったのだ。

そして、最後に瑞季親王と三男、花山親王が争うことになった。

満月鬼

瑞季親王には左大臣が、そして花山親王には右大臣がついたのである。

瑞季親王は豪傑で頭も切れ、人の上に立つことのふさわしい人間だった。

花山親王は腺病質で政治的な能力は優れなかった。しかし、和歌や漢詩のわかる人間で浮世離れしていた。

この正反対の二人の争いは熾烈を極めた。

しかし、瑞季親王自身は迷っていた。帝になれば望とは別れなくてはいけない、それはつらい。

しかし、花山親王を帝にすれば帝の権力が落ちてしまつのは目に見えている。

それは、避けなくてはいけない。

瑞季親王はある決断をした。

その決断が下されたとき、その場には正頼がいた。

瑞季親王は正頼が望を任せることができるかどうか試したのである。

そして、その試しは正頼を望にふさわしい人間として瑞季親王を認めさせたのである。

そして、正頼と望は結婚し、瑞季は天皇となった。

しかし、二人の生活も長くは続かなかった。まるで最初から結ばれることが許されなかった二人であるかのように。

二人は別れた後も、だれとも結婚することなく一人だった。

正頼は雪のようにふってくる見合い話も聞きもせず、ただ一人で生きてきた。

いつも、心の片隅には望がいた。

そして、望も正頼のことをいないもののように意識して扱った。

正頼は弓矢を握り締めた。そして走り始めた。

放たれた矢

「望！！どこにいる！？」

高次と一識は紫宸殿までたどり着いた。

二人は辺りを見ました。満月が二人の視界を助ける。

「よくきたな二人とも……。」

その声を聞いて二人は玉座のほうへ向き直った。そこには帝がいた。しかし、その声は違った。その声は二人の聞きなれた声、望の声だった。

「遅かったじゃないか。待ちくたびれたぞ。」

そういつて何かがゴトンといって転がってきた。

「うっ……うわぁ！！」

「帝！！」

それは帝の首だった。

望は帝の遺体を玉座からどけ、自分が玉座に着いた。その瞬間、望の眼が青々と光り始めてあたり一面が青の炎で覆われ始めた。

「もう、お前たちは手遅れだ。天球はわが一族の元へ還った。お前

「私たちはこれから私たちにひれ伏し、この世界はわが一族のもり、暗黒と恐怖に包まれる。」

「そんなことはさせない!!」

一識は剣を抜いて望にむかって歩き始めた。そして、望の首を切り落とした。

首は地面に落ち、真っ赤な血しぶきをその体の中からあふれ出させた。

一識は肩で息をしながら、血しぶきを浴び望を見続けた。

「これで私が死ぬと思うか？」

望は眼を見開き、体は一識の襟首をつかみ一識を投げ飛ばした。

望の体は望の首を拾うとそれをもとに戻した。

そして、飛び上がり、一識の首に剣をつきたてた。

「ここで、私への非礼をあやまればお前の命許してやる。さあ!! どうする!!」

「やめろ!! 望!!」

そういつて高次は一識から望を突き放した。望は剣を高次に突きつけた。

満月鬼

「望、こんなことでも何にもならない……。もう、お前の一族

の時代はとつくに終わってるんだ!!」

「だまれ!!わが一族はこれから復活するのだ!!そのためにながきに渡り、一族の者たちは魑魅魍魎に姿を襲しても待ち望んできたのだ。お前たちには言い知れぬ恐怖を与えてやる!!この世界の支配者は私たちなのだ!!」

「そんなことはさせない!!」

一識が背後から望に切りかかった。

「小賢しい!!」

望は全身から青い光を放ち、二人を吹き飛ばした。

そして、二人の首をつかみ、持ち上げ首を絞め始めた。

「死ね。」

「のっ・・・望、やめてくれ・・・。」

「望・・・。」

「やめるんだ!!望」

そこに現れたのは正頼だった。

正頼は望に向けて弓を構えた。

望は修羅の表情から一変して少し、涙を浮かべながら正頼のもとへ

歩み寄った。

正頼は弓を下ろしてしまった。そして望はその正頼の震える手を握って胸に寄せた。

「どうしてわかってくれないの……。やっと二人が結ばれる時がきたのに。やっと、なんの邪魔もなく一緒にいられるのよ。」

正頼は黙って聞いていた。決して目をあわさなかった。

「正頼。私はずっとあなたしか見ていなかった。どんなときもあなたを想って胸が張り裂けそうだった……。でも、この世界のままだったら二人は永遠に離れ離れ……。だから私はこの世界を手に入れようとがんばったのよ……。なのにどうして私に弓を引くの……。ああ……。」

望は正頼の胸に取り縋って大声で泣き始めた。

正頼は抱きしめなかった。そして、大きく深呼吸をして、望を突き放し、弓を構えた。

「ひどい……。どうしてわかってくれないの……。」

正頼は何も言わなかった。すると望の表情は一変した。

「わかってくれぬならもうよい……。お前も殺すまでだ。射貫くならするがいい。お前が気の済むように。そんな小細工じゃあ相手にならんからな。」

そういつて立ち上がった。不気味な笑みを浮かべた。

正頼は思いつきり弓を引いた。そして、目をつぶった。

そして、小さくつぶやいた。

望、愛してるから……。

弓は正頼の手を放れた。

どこにもいかないから

正頼の放った弓は望の左胸に刺さった。

しかし、何も起こらなかった。望はまだ生きている。

望は大声で笑った。

「くだらない。気が済んだか??こんな矢いたくもかゆくもない。」
そういつて望が矢に触れた瞬間だった。

突然、矢が光だし、奥へ奥へと入り始めた。

「何??」

矢は突き抜けることなく望の中に吸い込まれるように消えてしまった。

「まつ!!!まさかこれは.....」

望は胸を押さえ苦しみ始めた。

「わっ、私の魂が.....。天球が.....。こっ、こわれ.....
る。あ”あ”.....。」

満月鬼

すると望の体が青い光に包まれ、そして、その光がひび割れて砕け散った。

そして、そこには胸を射され横たわる望の姿があった。

赤く染まっていたつきも元の月に戻った。

三人は望のもとに駆け寄り、正頼は望を抱きかかえた。

夜の闇からは望敗れた一族たちのうめき声や、のろいの言葉がこだました。

望は意識を取り戻し、口を開いた。

「お前たちはやくここから去るんだ……。でなきゃあ。殺されてしまう。あいつらは神に滅ぼされる前に私を八つ裂きにする気だ。」

「もう、どこにも行かないから。」

そうだったのは正頼だった。正頼は微笑んでいた。いつもの穏やかな表情で。

望はその表情をみて涙があふれてきた。

正頼は一識、高次に言った。

「二人は早くお逃げください。」

高次は言った。

「それはできない。みんなで逃げるんだ。」

「お願いします。逃げてください。私たちはもうここでいいのです。」

「一識、高次、正頼・・・逃げてくれ。」

望がいき絶え絶えに口を開き始めた。時だった。黒い影が現れ四人に近づいてきた。

「早く逃げるんだ!!」

望はそう言って、起き上がり正頼を突き飛ばした。

望は影に向かって言った。

「私を八つ裂きにするならやればいい。だが、あの三人には手を出すな!!」

影は何も言わず近づいてくる。そして、望が影に呑みこまれ始めた。

「正頼!!もう、私もどこにもいかないから。」

そういつて微笑んだ瞬間、望は影の中に消えてしまった。

そして、影が大きく膨らんだり、しぼんだりを繰り返して、影の中から大量の光が飛び散った。

それは望の魂だった。

光は火の粉のように淡くはかなく散っていった。

そして、影が三人に忍び寄ったときだった。

影を光が貫いた。そして、その光は朝日だった。

そう、夜が明けはじめたのだ。影は次々と光に射され、そして消え去った。

移ろつ時

朝日が三人を照らした。

そこには何もなくなつた。呆然とする三人しかいなかった。

すべてが終わつたのにむなしかった。何もかもが灰色だった。

正頼は何も言わずその場を去つた。

高次は泣き崩れた。

一識は空を見た。そして、こぶしを強く握り締めた。

数カ月後

帝を失つた朝廷は亡き帝の唯一の娘を帝に置き、職を退いた左大臣に代わり、一識の父右大臣による摂政政治が始まつた。

しかし、一識は父の元へはいなかった。

父が摂政に就任する日、一識は出家した。

一識はこの世界に嫌気がさし、隠居することにしたのだつた。

そして、都から遠く遠く放れた地で余生を過ごすことにした。

高次は都に残り、皇族たちに楽を教えたり、宴で披露したりと政治には関わらなかつた。

高次は国の現状をしるため旅をし、そして、現状のひどさに己のおろかさをしり、自分にで

きる限りの行いをしようと政治の場に出たのだが、右大臣から疎まれてしまったのである。

高次は自分のふがいなさを感じながら、時々空を見て望を思い出すのだった。

そして、この国の行く末を不安に感じながら、ただただ笛を吹くしかなかった。

正頼は右大臣の元を離れ、望の菩提をひっそりと守りながら大宰府で暮らした。

望の前夫であるため、検非違使や参議たちの追及が厳しかったが、一識や高次、左大臣の助けにより難を逃れた。

すべては望のせいということで事件は終わったのだった。

そして、また都は平和を取り戻した。幸せに包まれたわけでもないが、差別や貧困、無用な搾取に苦しみながらも人々はまた日々の生活を取り戻した。

そして、いつしか満月鬼は人々の心から消え去り、望のことを思い出すのは三人の男たちだけしかいなくなつた。

満月鬼

そっかっ
て時は移
ろって
いくの
だった。

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728a/>

満月鬼

2008年11月7日06時45分発行